
Love is blind

藍澤青華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L o v e i s b l i n d

【Nコード】

N 2 0 1 7 B A

【作者名】

藍澤青華

【あらすじ】

神に近い人が存在する世界で、主人公ケトは恋をする。純粋な恋は変えようのない現実と真実に阻まれる。

最後に彼女はどんな決心をするのだろうか――。

それでも私は君が好きだよ――。

Act・1

厚い雲に暗い空。

まるでこの国を表したかのような闇に映える純白の城。

城内の広間に入りきれないほどの兵士で溢れかえっている。

兵士たちの熱気は凄まじく、一人の男の名を呼んでいた。

「ケトちゃん、はい　いつものね!」

「ありがとう!いつも助かるわ!」

ケトは店で買い物袋を受け取ると、不思議そうにドアの窓から街を見回す。

私のよく来る城下町はとても活気にあふれ、笑顔が絶えない所だ。しかし、今日は何だかそわそわと落ち着かないような、喜びを押さえつけているような、そんなふわふわとした空気が街を包んでいる。

「・・・おじさん　今日は何かあるの?」

「ケトちゃん、本気で言ってるのかい??」

ケトが不思議そうな顔をしているのを横目にため息をつき、

「我が国の勝利を祝ってるんだよ」

「勝利・・・って大変!!!」

「ああ、早く帰った方がいい　忙しくなるぞ」

この国は世界で今一番勢力を持っていることだろう。

世界は国の領地を広げ、自国の力を強くしようと日々領地争いを繰り返している。

そして今一番頂点に近いこの国は、軍事力もさることながらもう一つ突出しているものがある。

それは神子の存在だ。

神子とは、魔法を使うことが出来る能力者のことである。

神子は国に一人は必ずおり、神子と軍事力は比例する——らしい。

「医院長！！大変！大変です！！！」

「まあまあ、そんな慌てて・・・」

私、ケトは2年前から城にほど近い小さな個人病院で見習いとして働いている。

私の家自体は裕福だった。何不自由ない生活をしていた。

しかし、父が病気で倒れてからはとても大変だったのを記憶している。

会社を営んでいる父の不在は私の家族にまで影響を及ぼしたのだ。

いまは全快したので、笑い話にはなっているが。

そして父を治療したのがこの病院長だった。

多大な感謝とともに、自分も誰かのためにそうなれたらと思ったのがきっかけだった。

そして見習いではあるが、私の左胸には医療従事者がつけるバッジが光っている。

これは私の夢の第一歩なのだ。

「そうですか、勝利したんですね・・・。」

「準備しますか？」

「そうですね、なるべく沢山の負傷者を受け入れられるようにしてください。」

「はい！」

この国の勝利は確かに喜ばしいことなのかもしれない。

勝利を得た国の平和は少し保たれることになるのだから。

しかし、戦争で得られるものは勝ち負けだけではない。

たとえ勝利を得たとしても、この国を守るために戦った兵士たちの傷跡は残る。

肉体にも、心にも。

負傷した兵士たちは各地の病院に搬送され、一時的な応急処置を受け、入院が必要な者は大病院へと送られる。

病院に収まりきらないほどの兵士たちをみると、私はやりきれない気持ちになるのだ。

戦争なんて無くなってしまえばいい――と。

「ケトさん、新しい布を持ってきてください！大量に！！」

「はい！！」

今回も変わらぬの大勢の兵士たちが搬送されてきたため、病院は大忙しだった。

そしてケトは、急いで倉庫に新しい布を取りに行く途中で蹲る男を見つけた。

「・・・どうしたの？大丈夫??」

思わず声をかけたものの返事はない。

覗き込むと、足首を負傷したようで血がにじんでいた。

「・・・大変！手当てしなきゃ！」

肩に腕を回し、引きずるようにして病院に戻り手早く治療をする。幸い傷が深くなかったようで、簡単なもので済んだ。

ケトがほっとして顔をあげると、男はじつとを見つめてからつぶやいた。

「・・・ありがとう、本当に助かりました。」

「あ、しゃべれたのね！」

「はあ、まあ・・・。」

「しっかしお兄さんいい声ね！セクシーボイス！！」

「・・・・・・・・」

おもむろに男は俯き、肩を震わせたかと思うと笑い出した。笑い出して止まらない男にきよとした顔のケト。

「ありがとう、嬉しいよ」

そして男は笑った。満開の笑顔で。

これが私と彼の出会いだ。

今でも時々考える　もしこの出会いがなければどうなっていたのかと。

ねえ、貴方はどう思う？

笑って出会えて良かったと言ってくれるかな？

それとも・・・・・・・・。。。

A c t . 1 (後書き)

初めまして。

連載始めました。

良ければ読んでやってください。

Act・2

そんなに長い間生きてた訳じゃないけど、最近感じるんだ。
縁って本当に存在するってこと。

もう二度と会うことがないかもしれない、そうなることが当たり前のように感じてても次の日にばったり会うことだってある。

それってつまり運命なのかな？

だとしたら、ぞうきを絞っただろう灰色の水を頭からかぶって目の前にいる、昨日会った男の人ともそうなのかしら？

「声は相変わらずセクシーだから大丈夫!!」

「何のフォローにもなっていないよ……」

今日も街に買い物に出かけていた私はお目当ての物を見つけて帰る途中だった。

大通りを歩いていた私の横のドアから見覚えのある男の人が出てきた。

昨日、足の手当てをした人だと思い当たり嬉しくなって声をかけようとしたその時だった。

上の階の女性がバケツの水を捨て、それが男の人の――
――。

「まあまあ、大変だったわねえ。」

今はまだ冬。さすがに風邪を引いてしまうので、この病院の控室に連れて帰ってきた。

院長は彼の姿を見るなり、動じることなく風呂を勧め彼に温かい飲み物を差し出した。

私は、小さくなる彼を見つめて少し笑ってしまった。

彼はそんな私を横目で睨みながら、

「……凄く臭かった……。」

思い出したのだろう、眉間にしわを寄せて不機嫌そうにつばやいた。

「ねずみ色だったもんねえ」

「まあまあ、ケトさん。それで……ええと……？」

院長は目でお茶菓子と私たちのお茶を用意するよう伝えた。しぶしぶ席を立ち、用意をする。

なかなかあんな美形に会えることなんてないから、もう少し話したかったのに……！！
院長のいじわる……。

「ああ、申し遅れました。私はレナイ、レナイ・フィーレントと申します。レナイと呼んでください。」

「レナイさん、ですね。レナイさんはどこかへお出かけになる最中だったのでしょうか？大丈夫なのかしら？」

「ええ、済んだ後だったので不幸中の幸いでした。」

「そう、良かったわ」

「……………ありがとうございます。」

——あれ？

そう思っただけで彼を見るけれど、院長と彼の間に流れる柔らかな空気に何ら変化はない。

外の柔らかい光が彼の髪を照らして透き通るように美しかった。私の視線を感じて彼は小さく笑ってくれたけど……………。

——どうして？

どうしてそんなに泣きそうなの……………？

ふいに誰かが外からノックをした。

反応する二人を制止し、ケトがドアに向かう。

ドアの外に立っていたのは、先日まで入院していた兵士だった。

「お久しぶりです！調子はどうですか？」

「ああ、とつてもいいよ。ありがとう、ケトちゃん。」

兵士はケトの笑顔を眩しそうに見た後、部屋を覗き込みながら言
った。

「院長さんは……」

不意に止まった言葉にケトは思わず兵士を見る。

兵士は瞳を揺らしながら震えた声、唇でレナイを見てこう呟いた。

【神子さま——と。】

A c t . 2 (後書き)

ああ・・・一番書きたい人がまだまだ出番待ち・・・です。

Act・3

私の昔の話をしてもいい？

私の家族はそれはそれは私を愛してくれていたの。

私のことを尊重し、慈しんでくれた。両親も兄達も姉達も。

平和だったんだよね。でもそれってすごく尊いものだってことは父が倒れて思い知ったの。

両親は・・・危惧していたみたいけど。

その心配通り、父が倒れた間の代わりに置いた代理の人が、会社を乗っ取るうとしたらしいの。

家も・・・何もかも自分のものにする予定だったらしいわ。

そうなる前にほかの社員の人が動いてくれたし、父も回復して事なきを得ただけど。

そのこともあつてからなのかな・・・私ね、降って湧いた力つてやつが好きじゃないの。

確かにチャンスだとしても、その力を正当に使う人がこの世にどれだけいるのかな？

私は正当に使えるかな――。

「最近、何だか距離を感じるんだ・・・ケト、どうして？」

そう言つてレナイは悲しそうに呟いた。

レナイはあれから良くなってくれたお礼と言って、毎日ではないがこの病院に来るようになった。

何か手伝えることはないかというレナイに院長は最初の内は丁寧に断っていたが、レナイのあまりの熱心な気持ちに負け、簡単な雑用を頼むようになっていった。

だんだんレナイが馴染んでいく。でも、私は。彼を受け入れられ

ないでいた。

彼の視線を感じる。笑え、笑って何でもないとやってやれ。自分が笑えばきつと彼も笑ってくれる。さあ、早く。

切なくなる気持ちを無理やり抑えて精一杯の笑顔をしたけど。

ぎこちない表情で、しかもそんなことない、とかぶりを振るだけしか出来ず自分でも突然湧き出した得体のしれない相反する気持ちを持って余していた。

ただ、彼が【神子】で彼自身は……………。

兵士がレナイのことを「神子様」と呼んでからの行動は早かった。院長と私が呆然とする中、レナイの両手を自分の両手で包み込むように優しく握りしめ、胸の中にある思いを全て流すようにただ静かに泣き出した。

レナイは、一瞬びっくりしたように目を開いたが、切なそうにまるで自分が傷ついたように目を細めた後兵士の手を握り返した。

兵士は顔をあげ、許しを貰った子供の様に嗚咽を漏らした。

そしてレナイはこみ上げてくる涙を拭うこともせずに

「ごめんなさい……ごめんなさい……っ!」

そういつて泣き崩れたのだ。

「え？レナイが夕飯作るの？」

「うん、結構得意なんだ。ケトは何が食べたい？」

レナイが神子だって分かってから、院長と私は呼び方を一度改めたんだけどレナイがそれを許さなかった。その頑固さったらカミナリ親父も顔負けだった。結局私たちが折れたんだよね。

「そうだな……ハンバーグかな。」

私がまともに答えるとは思ってなかったのかもね。ひどいな……私は……。

レナイはちよつとびつくりしたように私を見て

「が・・・頑張るね!!」

彼は嬉しそうに心から笑った。

その笑顔にちよつと私も嬉しくなったんだ。

その後、あの兵士のことを少し考えた。

兵士はレナイに負の感情は持っていなかった。

むしろ神子への謝罪の気持ちで溢れていた。

レナイは力を正當に使える人なのかな・・・。

あの時、握りしめあっていた兵士の右手の指は全て無くなっていた。
た――。

Act・3（後書き）

思いがけず兵士さんがキーパーソンになっていました。
次回は兵士さん大活躍の巻。

彼に名前はまだないです。（付けてくれる人いるならぜひぜひ。）
イメージは「オールウェイズ3丁目の夕日」での役の堤真一さん又は「相棒」での役の寺脇さんです。

Act・4

誰にだって秘密ってあるよね。

誰にでも言えることばかりなんて人いないよね。

私にもあるよ。

実はね――。

その日は昼寝がしたくなるくらいの雲一つないいい天気だった。
洗濯物を干していた私の背後から声がした。

「ケトちゃん、神子様いじめてるんだって？」

「わっ！びつくりした！！」

声をかけたのはこの間の兵士さんだった。

今日は定期検診の日だったようで、真新しい包帯が光に照らされて眩しく光っている。

「神子様しょんぼりしてたぞ。偉大な人なんだ、あんまり心労かけてやるなよ。」

「・・・・・・・・。」

昨日レナイが作ってくれた夕食は本当に美味しかった。

美味しいといった時の彼の顔はまるで宝物を見つけたようにキラキラしてて……。

私も嬉しいのに・・嬉しいのに・・・・・。

そんな私を見つめていた兵士さんは、ため息をつき、しょうがないなという様に笑った後

「ケトちゃん、メシ食った？」

兵士は、奥さんが作ったという大量のサンドイッチを持っていた。
誰かと食べる予定だったじゃと遠慮したんだけど、そもそも私たちとたべる予定だったらしい。

一緒に食べようと言ってくれたので、庭にシートを敷き外食べる

ことにした。庭には近所の子供達がレナイと遊んでいる。私はレナイ達を眺めながらサンドイッチを頬張り、

「兵士さんは・・・魔法を使う神子様　っていう存在が恐くないの？」

「あ？恐ええに決まってるだろ。」

「でも・・・兵士さん恐がってなかったし・・・それに偉大だつて。」

兵士さんは遠くを見て、決心した様子で話し出した。

「・・・俺は魔法は生まれた時からきつと死ぬまで使えねえ。自分にできねえすげえ力を持つてる奴つてのは不気味だし恐ろしいもんだ。初めて魔法つてやつを見た時は・・・正直背筋が凍つたよ。俺は腕つぶしには自信があつたけど、・・・ああ、魔法使いの前では俺の力なんて赤子同然なんだって思ったな。」

兵士は笑っていたが、その表情は伏し目がちで辛そうだった。そして目を閉じ何かを思い出すように思案した後ゆっくり私を見た。

「ケトちゃん、神子様自身は恐いかい？」

「え・・・レナイ自身・・・？　ううん、恐くない・・・むしろ優しいし・・・」

兵士は太陽のようににっこり笑うと言った。

「それは答えにならねえか？ケトちゃん。」

「え・・・？」

「神子様自身を見てやりな、ケトちゃんの中の　神子様　じゃなくてな。きつと神子様もそれを望んでる。」

レナイもそれを望んでる・・・。

子供たちと本当に楽しそうに遊ぶレナイと切なそうに目を伏せるレナイ・泣き崩れるレナイ――。

「レナイはこのまま変わらないかな・・・。」

「じゃあケトちゃんが傍にいて見張ってやれ、な！」

私が、レナイの傍に――。

不意にレナイと目が合い、彼は花がほころぶ様な笑顔を見せてくれた。

思わず私も笑顔になって――。

うん、そうだね――。

――漆黒の月も星もない風の音もしない夜。

獣も寝静まった闇のような時間に映える赤。

衝撃は・・・無かった。

誰かが抱きとめてくれたから。あなたは女の人・・・？とても・・・
きれいな人。

意識が・・・途切れた。

A c t . 4 (後書き)

見事にヒーローがしゃべらず………(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2017ba/>

Love is blind

2012年1月11日21時47分発行